

## 1926 離島覚書（長崎県・桐ノ小島）



桐の集落から桐ノ小島を望む

令和元年 10 月 17 日

### 若松瀬戸と桐教会

奈良尾から中通島の西側に出て、若松島との間の若松瀬戸を北上する。

若松瀬戸は幅 1 km ほどの狭い水道で、小さな島々とリアス式海岸が続く。若松瀬戸は潮流が速く、島によって風が遮られることから比較的静穏なため、昔から養殖がさかんであった。若松島の離島覚書（1927）で紹介するように、若松瀬戸ではハマチ、ヒラマサ、クロマグロなどの魚類養殖と、真珠母貝、カキなどの養殖が営まれている。ただ魚類養殖は小さな経営体が以前はたくさんあったが、現在は 7～8 社に淘汰され、規模拡大が図られている。

中通島と若松島を結ぶ若松大橋の南側の瀬戸には、カズラ島、荷内島、野島、下中島、桐ノ小島、荒島などの小さな島々や岩が点在する。このうち人が生活しているのは桐ノ小島だけだ。現地を訪れるのは初めてなので、島が重なり合って、どれが桐ノ小島なのかよくわからない。

海岸沿いの道を少し走ると、最初の集落が現れた。桐の集落である。すでに 16 時を少し回っていた。桐ノ小島はこの付近だろうと思って走っているうちに桐教会の下まで来てしまった。この集落は西彼杵半島からの移住者によって形成されたと思われ、カクレキリシタンから明治期に入ってカトリック信者になった者が多かったようで、集落内には桐教会が置かれている。この教会は 1897（明治 30）年に設立され、現在の建物は 1958（昭和 33）年に建てられたものである。

桐ノ小島の位置を確認するため、高台にある教会まで階段を登った。荒島（無人島）と桐ノ小島が並んでいて、荒島の方がはるかに大きい。教会の下は細長い水路になっていて、小さい方の島が桐ノ小島であることが確認できた。よく見ると本島側との間に小さな橋が掛かっている。なお、「シマダス」（1998 年発行）によると、桐ノ小島の北側に位置する荒島には 1955（昭和 30）年の国勢調査時には 12 人が住んでいたが、1959（昭和 34）年 12 月に全員がブラジルに移住し、以来無人島になっているという。

令和元年 9 月末時点の住民基本台帳上の桐集落の世帯数は 43 戸、人口は 91 人であるが、

この中には桐ノ小島の島民も含まれている。ちなみに 1975 年国勢調査時の世帯数は 77 戸、人口は 315 人であったから、およそ半世紀の間に人口は 1/3 以下に減少している。



海岸沿いの高台につくられた桐教会（左）、桐教会から見た桐ノ小島（右）

### 日本一短い架橋

桐ノ小島は中通島の旧若松町桐集落の一部を構成するちっぽけな島である。面積は 0.04 km<sup>2</sup>、周囲は 1.1 km しかない。東西に細長い島で、島の東端に本島との間を結ぶ橋が掛かっている。

中通島と桐ノ小島の間は細長い水路になっており、その幅は 10m ほどだ。橋は 1961（昭和 36）年にできたもので、橋の幅は乗用車がやっと通れるほどしかない。桐ノ小島は有人島なので私にとっては島旅の対象である。おそらく有人の島と島をつなぐ橋としては、日本で最も短いのだろう。

橋を渡ってほぼ直角に左折し、海岸沿いにつくられた細い道路を進むと、すぐに行き止まりになった。その間約 250m ほどである。行き止まりの付近には養殖に使われていた発泡スチロールの大きな「浮き玉」が 2 個放置されていた。その先は岩礁海岸が連なっている。

この道路の内側と山裾の間はずかばかりの平地に家が 5 軒並んでいた。人が住んでいる家は窓越しに調理道具が見られるし、洗濯物など干してある。また車などが置かれているので、空き家かどうかはこれまでの経験からだいたいわかるが、5 軒のうち常時人が住んでいると思われる家は 2 軒だけだった。1995 年の国勢調査時の島の人口は 16 人であった。1998 年発行の「シマダス」によると、3 戸 7 人が住んでいることになっているのでこの間に半減したが、現時点ではおそらくさらに減っているだろう。島で人に会えたら、確認しようと思っていたのだが、あいにく人の気配はなかったので、叶わなかった。

家の周辺には小さな菜園がつくられている。島に住む人のものに加え、時々島にやって来て耕作している畑もあるようだ。ところがこれらの菜園はネットや鉄のメッシュで厳重に囲われている。この島にもイノシシが棲みついている。水路側には手づくりのポンツーンが浮かび、小さな船外機が数隻係留されていた。

海岸道路の行き止まりの 50m ほど手前に島を横断する道路がつくられている。その坂道の登り口に平屋建て瓦葺きの一軒家があった。家のカーテンは閉まり、人が常時住んでいる様子は見られない。家の前の畑ではサツマイモがつくられていた。この畑もメッシュで囲われており、イノシシの侵入防止策が講じられている。右側にはトタン葺きの平屋の一

軒家があり、屋根には太陽熱利用の温水器が置かれている。こちらは別荘として使われているようだ。



水路を隔てた右側が桐ノ小島（左）、軽自動車がやっと通れるほどの狭い橋（右）

## 廃屋

この横断道路の先に何があるのか、兎に角、行ってみる必要がある。車を海岸沿いの道に停めて、歩くことにする。車は細い道の真ん中に停めたが、島内を走る車はないから問題はない。山越えの道は、両側から木が茂ってうす暗い。夕方にかかっていたので一層暗かった。イノシシが出没しそうな不安がよぎる。

峠を越えて下った先は海になり、海岸沿いの谷間に建物が4棟建っていた。2棟は瓦葺の2階家で、2棟は倉庫のようだ。ひょっとすると2世帯が暮らしていたのかもしれない。2階家は明らかに住居だったと思われるが、完全に荒廃していて、すでに放置されてから10年以上は経っていると思われる。

家の前の海岸には斜路が整備され、漁船を引き揚げるための線路が3組つくられている。一部の線路は打ち揚げられた砂利で埋まっていた。そして線路上には船台に乗せられた漁船が1隻放置されている。傍らには荷物を引き上げるためのデリックが錆びたまま放置されていた。これらの遺構から判断すると、この家の住人が漁業か養殖業を営んでいたと思われる。



廃屋の一軒家（左）、放置されている漁船（右）

「シマダス」(1998年発行)には「海面養殖業などに従事する数世帯のみが居住している」と書かれていることから、おそらく若松瀬戸で魚類養殖を営んでいたものだろう。

この島の漁業者を統括するのは若松中央漁協である。1990（平成2）年当時の同漁協の魚類養殖経営体数は50ほどあったが、現在は6経営体に淘汰されており、この淘汰された経営体の1つかもしれない。

廃屋の周囲は暗く、かつじめじめしており、一応舗装されている道路には落ち葉が積もっていてなんとなく不気味だ。突然にイノシシが飛び出てきてもおかしくない。辺りの写真を撮り、そそくさと元の道を引き返した。

### 漁業と農業の道楽

本島との間の水路には竹と板で自作したポンツーンが2台置かれており、脇に船外機が係留されている。船には曳釣用の竿が置かれていた。島の2軒の家がそれぞれポンツーンを所有しているのか、あるいは桐集落の本島側の人が利用しているのかもわからないが、聞くこともできなかったので想像の域をでない。何れにしても商売用の規模ではなく、もっぱらオカズの魚を獲りに出かけているのだろう。つまり桐ノ小島の漁業は道楽のレベルにある。

おそらく以前は山の上まで段々畑が続いていたに違いないが、現在は島の大部分は山林で覆われており、農地は家の周囲の平地にあるだけだ。このわずかばかりの農地にはサツマイモとサトイモが植わっていた。また椿が植林されている。ただし樹高はまだ人間の背丈ほどしかない。新上五島町は椿油の生産が伊豆諸島の利島や大島に次いで多いところだが、椿の実を収穫するためだろう。何れにしても漁業と同様、島の農業も道楽のレベルにある。

結局、桐ノ小島では誰にも遇わなかった。再び橋を渡って中通島に戻り、対岸から桐ノ小島を撮影した。ちょうど橋を渡る車が見えたので、島民が帰って来たのかもしれない。追いかけて取材することも可能だったが、相手からすれば何事かと思うだろうから、断念した。島民に話が聞ければ、もう少し島の実情を把握できたであろうが、やむを得ない。



水路の設置された手づくりのポンツーン（左）、横断道路の登り口にある民家と畑（右）

小さな入り江に形成された横瀬、深浦、築地の各集落を経て、主要地方道・若松白魚線に入り、若松大橋を渡る。若松島側の道路脇に整備されている「潮の香薫る公園」に寄って若松大橋の写真を撮影しようと思ったが、あいにく小雨が降り出したために断念。神部地区にある今晚の宿の「民宿・えび屋」に向かった。